



巻 頭 言

不 易 流 行

財残留農業研究所理事長 栗田 年代

冒頭から身勝手な話で恐縮ですが、不易流行は、芭蕉の俳諧文学の根本理念の一つといわれております。不易流行の解釈については、芭蕉の弟子の中で土芳説と去來說が対立しており、後世の学者もこの点をめぐって甲論乙駁、議論が賑やかです。ある学者は、芸術的真実（風雅の誠）を静的に把握したのが不易、変化流動の相において捉えたのが流行といっております。

私はこの道の学者ではありませんので、勝手に又極く平易に考え、時代の新旧などにかかわらない永遠不変すなわち不易性と時流や個性の変化すなわち流行性の二面が芭蕉のいう「風雅の誠」の根本にあるというふうに思っています。更に、独断的に敷衍すれば、俳諧に限らずこの世の多くのことは、不易の相と流行の相とが時と場をさえ微妙なバランスの下に漂流しているともいえるのではないかと思います。

それはさておき、目をわが国の食料・農林業問題に転じますと、今やわが国の農林業は有史以来の大転換期に直面しているといっても過言ではないでしょう。最近の事例を二・三あげますと、例えば、ガット・ウルグアイ・ラウンドの一応の決着を受けて各種のフォロー・アップが具体的に進んでおります。一方、地球規模における環境問題が大きくクローズ・アップされております。このような大きな舞台の激変の中で多種多様なインパクトを受け、わが国の農林業は存亡の危機にさらされております。そして、「ウルグアイ・ラウンド農業合意関連対策大綱」がきめられ、又、「新たな国際環境に対応した農政の展開方向」も打ち出されました。こ

れらの関連の中で、環境保全型農業が地球規模で問われており、また、わが国の中山間地域問題が国土、環境保全の視点からも位置付けし、その活性化を図る必要が叫ばれております。他方、新たな米管理システムの構築が焦眉の急となっておりますが、これを含め、新しい食料システムの確立が必要だと思います。そのほか、水資源の利用システムの確立、各種の規制緩和問題等多くの問題点が目白押しになっていますが、植物防疫も根本問題を含めて大変むずかしい課題を抱えています。

いずれにしても、1995年は太平洋戦争敗戦後50年、戦後に構築された政治・経済・社会等のフレームワークは、今や、基盤の場面を含め根源的に見直さざるを得ない時期にきたと思います。農林業関係は特にその感が強いのではないのでしょうか。近年における世界の潮流とわが国の農林業の動向を俯瞰すれば、21世紀の発展のために、今、清水の舞台から飛び下りるような決断が必要ではないかと思います。

しかし、この際、変化させるものと根幹として維持しなければならないものがあるのではないのでしょうか。従って、根源に立ちかえて、不易性と流行性を十分に見極めることが必要です。しかも、当面の利害得失は論外とし、相当長期的視点に立った検討が必要だと思います。更に、これは国民的広がりの中で議論を深め、国民全体のコンセンサスを得ることが重要だと思います。そして、「不易」と「流行」が真にバランスを保ちつつ革新が進み、21世紀へ向けて明るい展望が開けることを期待します。